



新編

古今事考

卷



丁酉年世乙二注釋

新撰 舟子問答集

舟子問答集 萬石堂主人



海夜半より舟子問答集
舟子問答集 舟子問答集
舟子問答集 舟子問答集
舟子問答集 舟子問答集
舟子問答集 舟子問答集

とまり 詰集のついで
惜む しく ちきよのき
喜 病 強 しく おき
枕 しく 一 子 不 説 高 中
儿 童 世 しく 年 波 の 経 舞 越
津 しく しく 人 世 の あり

一 集 越 撰 書 肆 佳 業 あり
ち しく 色 阿 を 智 しく 大 師 しく
小 祥 忌 辰 あり 不 義 あり
は しく 早 と ち 世 の ま しく ち
を しく しく 世 しく あり
道 あり 氏 しく 若 しく あり

そはつらうの御を雪もむらり又
わがまもも免せ旧識五十余年

雪の中へ
あまの

燕翁白集卷之上 几董著

春之部

やうらうらうのやうなやむの春
日の光とるのや鶴乃のらや柴
之腕の雑煮とるのや長者の

離落

ふらふらのあちちとるのやふらうら
雪乃声とるのや日も暮らうら
うらむらの産おとるのやおとる

嘗を雀んとえし一も此も喜

画賛

くしそや資色く後斬る梅
雪の日枝をどりしりなる音
くしそや家内梅を飯町か
雪や茨を穿て高き花
くしそ乃啼やちいさき口ゆて

禁城春色暖蒼々

青柳やふ大男乃竹より

若きう根を口れる柳を
梅ちてさひく女一やあはれ
捨やうて柳はしるる雨の心
石柳や芥生の里のせうの中
こる枝をくしそや柳を

草庵

こもれ梅くま速をさす
くちかて雛手くくはさる
白梅の星若くは鴻鶴被

あら梅や浪心くしよ深垣乃外
舞くの場もかきく梅うもと
心原とて心まあるめくめ此宿
宿の梅おれをんちありくく紫
摺子木て重紫をてはくふ
てくきよく政の嚴判を
をいさくちあふゆきを出代
乃其うあき

隈くく梅のささやうをれ此を

しう梅や少せく茶居くさすられ
らあや螺鈿あけく卓の上
梅咲て帯穿くふ心のおか
原儿をうりて梅のあき
地をきて人あをさか梅う宿
あきあき一の伝名あしやあ
字儀を言あきんハア
梅咲くこれあきやうあ
あら梅の宿あきもさる月あ

小豆工貴小家の梅の花がみくら
梅を色 南ヶ原くふすぬく

早春

ふにち女十京をさぐる世忘後
所忘の掃ゆくや谷の氷すそ
やふ入の曇や小豆の煮るうち
新つるやを庭目さうのそを宿
やぬらうや守袋をりよせれ草
箱ふ入や移架ゆいある傘の下

やぬ力ち中山寺乃男こさ

人日

七さくや袴のぬ乃片むす
あれきうく徑きくう芥の中
右もやあうくく控るさう中
几董といきれをる

あさひー時

節まきくをんおふり春の春
肘白せ僧乃くあや宵のそ

春の夜もさるを思ふをさるるを
春月や中堂の木間より
春夜聞琴

潇湘の竹の音もさるるを
お祈り馬帽をけしお祈り
公達く孤化さるるを
そらさるるの待春ハ千金の
音をりりお我々の音ハ
むらさきの曙を賞す

春の夜もさるるを思ふを
女俱して内裏ぬすんちるる月
茶はさるる女やさるるを
さるる人を宿りてさるる月
さるるをさるるをさるる月

野分

草や井水も声もさるるを
指車や胡比よりさるるを
さるる舟もさるるをさるるを

橋ふくして日暮んとする春乃水
衣水や田条五條乃橋の下
足よふのつらうて溜るる此の
春乃水背きく田仍んとて心ふ
去の水くうたぐ橋繩の垂るたは
地を這ふ鶴のなまひや春の水

西の京よをけの橋て

久しくあれ果る家

五ふりけいせきふし

春雨ぬ人住て橋壁を渡る
お鐘の袋ぬりた春乃あり
春雨やかほある路中若うたり
まゐるや山後のお具ぬるかと
流るる知を海声や春の雨
ぬまひせふ池の水を春乃雨

春乃雨

春乃雨の書ぬるおれありある
を流るるや春あんとてはなまを

春雨のあつちやく養と命
朱流の流もわらそ花の雨
春雨のあつちやく養と命
まのこや潤う程う小こころ
ある陽生るるを

古庭の茶釜花さく梅の花
あちちや椿庭らむにほよみ
玉人^{タマシ}ははるるにわらわら

物年をそのまゝくろ袖たひ
たはむやる羽田塚の跡の跡
初はやお行りり日のある
蒼らふあれも志らまよふ
ある人れも

命婦のあちち餘たをよ彼を
うみくに京をるるめ田に
ふたつは津もれ里や田標あ
静さう坊でぬんたより

乃とて驚破田に一の土を固る
丁行で門田もたかくおもはるし
海も田もよの月も日もあつ
まはあまこまいた厚のあまあま

郊外

陽たや名にしめきの白きお
ふりりあも實く土をぬたひのく

芭蕉庵會

畑はけやよふあふとすくあつあ

まをすをあたの在所の種々
細おやあるれされ種々

ふあつて

春あふ中くおあられはあ
見るとは稚子を春のふたふ
柴刈く若をまゐるや稚のま
亀のつ魚よ大工やさし
瓦のや何うたれてさし
むと起て稚あまや宝こら

平の澄く自類に住まふ御外

弄心挑美人

妹の垣柵
司馬相如の故事なりきせんまハ
世のついでにせんしんしんしん

妹の垣柵をみま草乃花咲ぬ
お梅や比丘よりある比丘尼寺
紅梅の薔花燃らむ馬の糞
垣柵もものちるる接木外
裏門よりちに逢着むとあそむ
畑もちや法三章すれのもと
さし傍や草の生え乃八平氏

ハ帝京也其角三百員の内のみハ
馬蹄今秋をさきり推る家と
こゝろは詩よりきり
畑もち
漢の祖の咸陽より一時の故
又魏朝の俗業をたたくは時代と
考合す也

さし傍や坂をたりの驛舎
西山を是日
ひる乃尾をぬむ春の入り日
まき日や雛子のりなる橋の上

懐旧

庭の日のたのむをむらう家
妻の所歎日のさし
鳥のつやをみる啼ぬひりけ
耕や五石乃粟のあまの白

まじまじ
一鳥不啼山更幽すれ玉耕ら
待る耕もち畑もち俗を
て持ちまはるる

おろすやけさるや我産
 大はつろの糞をゆく意の子
 大初孫の宮もつゝかもはをあふ
 はをくらや水田の風う吹れ良
 蒸沸て次蛇をうつ小家の

無為の會

曙のひらききく乃幕や春の風
 みえきよのほゆら流や春のうせ
 片断くさるは流るや春乃風

のうとくく東風吹せの心居は
 何ゆゆや春乃流るる巫女う袖

几董の蛙合催し

月つゆ々蛙たのむる田面二方
 閑くはてをせ蛙をさくあけ
 苗代の色減るおふうはたうれ
 日ハ日れをぬいぬぬゆと端蛙
 連系しての流ある羽の蛙は
 獨鉦鎌首水け端のうりつを

獨鉦鎌首
 顯昭ハ律傳まで獨鉦をよせ
 和歌のたよりを伝へしと論井

ちう取連はあハ豫首せしとて
二入對面するところの山をいふ
井蛙抄のそと

くはるまゝつまゝあらん此胡蝶小
曉の雨やむくろ乃乃層りら
よもやうら青たのきあや種後
古河此流をり片種たらし
去のりく南階も焼物
か入取長帯かはいまもあま
も乃こころ東古曾紀の入りて
乃だんらんむおんす及んて
錦の小袋をいさうとあらう

山ふみや

左を移といふ所の地因法師住
本柄の持の絶層ハ昔カ井手の
桂の舞物のなるいけ因

ゆらんなるおもしろくはる
春色うたふす結れた
山ゆめ井手を流す 艶眉
層た子舟を上れハそみれハ
骨松よんこ志くす桂のそ
けいんやんそお舞ん枯ア
野ももに焼る地お此志
片一也やあゝ所くあふ畠
片一也や石移したる娘さ

近江へ来ては水々々 躰濁り
片し咲て片山里乃 飯白し
岩々腰我れをえり片し身

上己

古雛やむりしの人れ袖儿性
花をひる良月をれや雛こ對
たうちもの此をよとあや雛の鼻
心付や長さありくと古首を
雛見え乃紅をりくらや長の雨

雛をふる都まらぬや桃乃月
嗚や痛て半つたならわや桃を
南人を吼る不あのもは花
さらば東桃つてさうさ小家小
家中をこさむり振るもは春
几やせあふのそのあうとさう
やぬりのあうてさあん中の糸
風入馬蹄輕
木の下う蹄乃うきや散さる

まきくらの夢は片一の梅が
剛力の徒に見るや山さくら
曉臺の依れ流家よ抱く世にて
抱枕林を夢あうは強我の梅人
暮人よ春をくくちのふさくら
銭買て今やよりけい山はぬら

糸梅賛

中へ暮して雨もる春やいとふらら

糸屑の梅は吹れて山は入る言

五十一
古今集より
別後のまくらあそびはあまのわらわ

とほのせと糸屑の梅は今集より
まはりのまらう山はあまのわらわ
まらうの梅はあまのわらわのま
とほのせと糸屑の梅は今集より

あまのせとおどりとともあれ山梅
咲ぬいと日閑院探乃さぬら
みよりあちちるる山梅
旅人の鼻あて梅はあまのわらわ
あまのせより日ハ照はけそ山はぬら

吉也

花をなく梅は近江の川
花を暮してあまのわらわ
花あるやあまのわらわの

糸屑の梅は
もて 考へ味ひまらう

花の世絶して世を位、位を人
阿た之世のさくもさくもさくも

高野をたつ日

ふれ住て花の真田、諷うか
正川くさくせ、花や流れ去
ならんや當眼をさけり花一本

日暮るしをたつ日

岨峩へ海をくくこの花は暮
花の香や送客のとも火清き

雨日ありてあきふ

幾士の簑やありの花衣
形骸ハ後の世にけりたもえり
花を舞でぬきあど白拍子
花もまてたもいねるいもあ

たのしみ人のあやめ

やまのめを訪れて
礼を踏一草履もたておあ
居風きくおあきく花のまゆり

管ふたましく帰や花のひ
物な花の春ハ情恋入花ふりて

一片花也減却春

さゆ指義人乃孫や減却を
花の鼻舞好を歌く 女あま

やふと花をけけふのさるあり

はせあひてうけふひ引地

こそあひるさるあり

小冠者白けて花たる人を外にりり

さくく物

一片花あて減却春うらわハ唐の

杜子美う待句一花もろおび一遍

くハ春うゆるとつふらじ 却字ハ

忌却失却未の却字とおまじく

熟字なり

苗代や
十のちんちんさほま

おちしある夜もあまき春の春
誰よのひも花をたなはれ
閑帳乃歸たまきうき春の夕
~~~~海のさひれも春の日はたう  
春の夕たしあひさる香をたう  
花ちやあまらる寺とあひり  
苗代や鞠るの篠ちうくち案  
甲はなまふこやあさうれ梨の花  
梨のも月書よむ 女あま



くふく日ありて培ふは師を  
ゆもとん米踏音や春のちぬ  
くはむるに春をあらけて春は花

春景

菜の花や月よりありて日ハ西  
たのそぬや筆かある少くはあ  
菜の花や鯨もよらぬは春め  
長次庵會  
行蹙て南院の風はく入力日

菜の花を七日ハ  
あつた十牛のま  
中二句ハ洛外のくき  
菜の花や鯨  
南院乃西院乃の唄く兵庫の  
くらすぬく菜の花はくあつた  
くの田舎のむらあつたあつた  
かゝくふまはく

ゆふたまは  
維摩尼ハ一丈四方の家み六れ  
を集めて流法はくゆい維摩尼  
あつた一丈四方の家み六れ

極むるや床ハ維方々成替る

暮春

ゆふたまは遠巡してはまはく  
ゆふたまは播者をくむ哥乃主  
流足の鹽もゆきゆく春や  
くあつた春をあらけては舞多  
台波のふ葉をあらけて  
ゆふたまは花乃中垣乃いよ  
春をくむ座主の膝白くはれは葉



行きたせむらひの夜羽の  
まゝ長き道の田の春の夜つゝふ  
ゆゑ春の横河のあふゝもの神  
あふゝくゝのまゝとて

西の空をまき女をとりぬの春  
春情をまき女をとりぬの春



夏之部

絹衣のきぬあしゆりて夏衣  
辻をたぬき人のせはころもえ  
大兵のたすあまのやふあえ  
ころもえあしゆりあは二く

歌合

夏衣あしゆりの金うた白  
たのしきあまのめりの給は  
瘦膝の毛に微風ありあえ

楊の  
楊のうへへまきかひをまき  
ふとあまのせうく 傍り かたハ  
かまふまき 香のあまきとふまき

はるけのあまのりそを夏の衣  
えれるたのまのまよりの  
あまのりそをのりそ  
あまのりそをのりそ  
楊のうへへまきかひをまき  
夏の衣いやうらまをうらま  
鞠をるあまのやかとまき  
あまのりそをのりそをのりそ  
子祝 柩をたふむや間が案



あきまは  
四郎二郎ハ古は昭々俗名あり  
ふり  
出るくの  
はゆくささるやうに  
ゆふらあしと  
ゆふせはれも  
はし湯治場の  
と

あきまは  
あきまは侍や都のそらたのめ

大徳まこて

あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ

あきまは侍や都のそらたのめ

あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ

あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ

あきまは侍や都のそらたのめ

あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ  
あきまは侍や都のそらたのめ



度々の  
文選の持中と相去り万余里各  
在天二万

山蟻のあらしはるこ 白牡丹  
廣庭のちんや天乃一方  
集落乃主人在給布穀の  
二是をむしてはこれ一語  
発るをよみてはこれ一語  
玉候々交らむ方のハ鶉衣被裝  
みで山ゆき名利といふは  
お唐土の首かけくは鞆鞆を  
用辰名 ちんや 集落乃 やいふ

山人ハ  
かゝるいふまじき事ハ

山人ハこゝろをさうハ鳥なのり  
食次の成たなくま目やうんこ  
と疎を字あもあまはす用辰名  
と乃め々置のちやんこ  
ひたしと鳩の礼義やんこと案  
用辰名さうの枝も踏て居る  
うてさうのもたう不可もあか  
揮紙每盛  
名のれくあ志のうらちを



をうらむるをうらむるをうらむる  
青ののぶく音まの杜の  
や裡をく柳まの別る

升一うおや六里の松ま更たお  
船をたておらてまのちお軍の門  
升一うおやまのちの上まのち  
経おや同ん流乃川も水  
と一うおやたまのちをく浪屋  
経夜や芦河原を解の泡

こゝろ  
けの八尾やう大るくまのち  
る

みりおやニスるまのち井川  
揮の老犬

みりおやを解らてまのちおの  
経おや浪らち原乃捨篇  
みりおやまのちをく白拍子  
升一うおや小又世解るる所まのち  
京都の今をまのちの揮まのち  
経おや一うあるまのち志賀の松  
みりおや伏見の今をまのち淀の意

こゝろ  
けの八尾やう大るくまのち  
る



卯のむしの天のちりて落の塵をよの  
まてをれそ夕乃橋実とそよのり

糸位上人の五乳のまじりて

たる力のまじりてさきほこ

実ささや花のころたる庵のこ

志のりややをえくあくく夢の雨

砂川や或ハ夢を流北越

夢の葉をけ君とりそ雀 帆

三井さるや日ハ井のまじりて若 柳

夢のまじり  
すれ難ハ 射難のまじりて  
てハ射す 夢のまじりて  
晋の王子 夢のまじりて  
つりて 夢のまじり

あらたうそをトたるに

物まよ小幡まよらぬ住みよ

妙尼をきて奈良とまよふをよ

窓の燈の秋相くのちる若葉小

不二とつうつとみしつうとつ

施頂の城たのしむとみちあふ

新葉して水白くま夏黄くそ

山くほきて小舟漕ゆくあをよ

船を截てり後名路のあをよ

窓の灯の

保ちてハ 寺のやあのかつ  
灯のまよとつらあうまれを寺  
町にあのまよにひらきよるをん  
一ハ寺町ハ 寺のまよとつらあ  
まをよん ああまよとつらあ  
あまよとつらあ



坊の肉くちる新で、葉や  
尼寺や能々慚たる、宵月夜  
あら深し、裾吹坊はも根は草  
坊をきて肉く居る力の夜、めめ  
もよこら三本樹の

水橋く真して

めやまを夜をきてや、よら  
百井戸や坊く、鳥か笛の音くら  
ふ、風く坊の庭水ゆく、おほし

くハリせよ  
袴子ぬききうし、ちの余情ハあまを  
書屋まよとこ、こましく、上風のまま

坊やりと、やうき、信の坐存系

出たおまのて

三新系ス坊く、乃くやり、  
坊の音も、悲の花の散ら、  
諸子比、校の信る、今よ、  
いと、坊よの、めれば、行われ、  
坊は、坊く、翠、微、坊く、ま、家、の内、  
若竹や、坊く、女、あり、坊、  
笋の、新、の、葉、肉、や、を、

より、坊、  
書、坊、



為竹や夕日の光を映しぬる  
筍や 瑠璃の法印の寺とらん  
くはも 離さるるもあはれ  
垣根の墓の遊ちりやうさ  
岩家の雅周の閑を信て

うらぬ音あやまを花もと  
も旅やなませ村乃妻ふら  
病人のなるも色なりまら乃秋  
旅を居移まらむと此後とて

信東の石中流庵より

目あのかげをせしむる

あるまはせし京をいりて植まら

狐火やいれと何れ乃妻ふら

大魯几童ふとくちりけら

ちりてかき逢仲竹

翁や植まら仲乃水車

丹波の加ねとてあま

なるを紙まけりよよにる後

〇

信東



あはるる欲をあるの平道は  
飯桶をあはつと樹下へ床几  
動けし侍ももあはる  
餅すわさ招く様くやう家

免足之角正當ハ女月仲の冒

なるを卯月の夕方にあて

追はるとふは後にはあて

麦刈ぬ出ぬすも中を法の程  
かうそがに子自合生けの谷の房

かの東臈このをれを

花いさらぬの跡よ かしら  
路たてて香くせまの候いたらう  
愁ひ片し思ふのをれを花いさら

洛東芭蕉庵成日

耳目肺腸あは玉君をを成る  
まを梅の眉あはれぬ美人か  
青くあをよてはるあるを舞あ  
うちりやむいぬの女音あちをる



夕月や水青鷺の腔をくは  
たちをふるふる水時や古鼓  
浪花のてをきくはなれて

糝解て芦吹凡の音ゆり  
交山や海にふれたるは猿人

逐懐

推の花くもまをさあくるちの  
水保く利謙竹ら守まは流り  
志のまや赤の追江の麻呂

採草を洞ふ言根の徳まの  
原のむやけられら此月もむ  
踏るこの刈る原花さくやるの  
虫のまに害りれ落つ枝の花  
浪華を舊ふあやうて  
法必れ俳士を佳まのそ  
あふま今道一りも時  
うさあを吹あつたや花あり  
さみおのうら柱や老り年



湖へ富士をまよふてはさ雨  
 きみはれわた河を前う流ニ新  
 またれや佛の光を捨りける  
 小田原へ合羽寄りの白傘月雨  
 さみよ水乃大井強たるゆとさ  
 さはふ雨甲毎乃園とあひぬ案  
 青飯は仰にたしめて遊ばに  
 旧歳の糸とくうこの合を  
 水桶うらまつてあおや此茶子

花とよの礎うちをむる木立  
 園十秋ゆりきてりやなこそら  
 存やし玉笈く地<sup>ハハル</sup>震たつ地外  
 行くてあはに 行く なるおさ  
 みちのくは吾はまゝ草麻を  
 たうれて

葉うぐいの花さうせと 思ふさけ  
 離るれたるかさを踏めて田抄か  
 籠りてある田花乃 男うさ



持衣の袖のうら這ふはるる  
一書生れ用窓の半を

学問ハ成るうめけるはるる  
了しやう此用字乃にしと  
旭年の佳きと宿やうせ貞  
おもやう成るうめやう  
雪信う頼らおふ 頼る車

愚賢

お葉多くおれはるる女はるる

関の戸に小雛のそら青なるはるる  
唄乃斬も合歡の毎はるる  
頼はるるをたのこるるはるる

春原屋舎を寄る出たはるる

誰住て橋流るる新川は  
志のめや物をはるるはるる  
老あり物のはるるはるる  
るる乃各名を自ふる新川は  
新舟漕ぐはるるはるる

老なうー持衣  
二人はるるはるる  
「と」いへば持衣の海をよこし  
隔てはるるはるるはるる  
秋田の土ぬるるはるるはるる  
作てはるるはるるはるる



中七下五直實境こ又二介城志ハ  
留止必流直下の他と備一そハ陸  
をこハ在の「~~...~~」のそを 兄一  
常人と大家のせううとま多極

る百日墨もゆくまぬおくろくふ  
日と以てあふる華の夏あふ  
孝子病存不二の夢  
兄の家つちやもして

降くて日投を北干乃化糖を子  
る上判髪三本掛きて  
服ある梢もせみ乃小何ハ  
石上の鑿こしたる清水うか  
旅舎を音なくあたる清水ハ

丸山立水うさいさせ堪を写し  
たるに讀をよとのそみたるを  
仕友縣令の比く常判を  
もとのむらあふ志やし屋を  
流伸く曳くこま

鏡魚の青磯もきらぬ山居水  
ラへてむをを濁る居あふ  
我宿くうあけ居きくみわ  
草いせ九人死居る丸の立

二人  
句解上二目へえかり





さうかやかの乃唐乃三十里  
ゆあうかや黄の心もあはる  
夕白の花嘴の猶や解ふさう

律院を歌さう

心石もこの四ツさきれうき舞  
蓮の香や氷をえある、若二寸  
ゆき乃浮きあうる蓮の心  
白蓮を切らんとおしふ僧の唇  
河骨の二もさうや雨れ中

たこのみとれあをうと  
やをらたら入まいる  
いとたうとて

羅く遮る蓮乃くちい哉  
夜日三句

雨乞く是る國目乃ちみだ  
負服の字敏も障ら早う  
大粒な雨ハ祈乃奇特うな  
お小る里人のあやるれ月



此小生の  
 母乱（？）官人の漂ゆる此世  
 はあはせしむるをちりひよせしむ  
 作あり唐詩逸る青門去テ種此作  
 マコトを小生像してかくしむ

臺ちのろ中草ふもた友の月  
 めげけろは能はるも夏はる  
 阿童の思はる宿やなる月  
 此由來乃月よやおもはる子  
 雷く小生ハ鏡水て此の心  
 あゝ花ハ雨うらめて此をけ  
 あゝうらめて

弓矢の節の袖をたひり  
 細腔マタ見さるる 簞

築穂うて

あまのの比然もちどり築穂山  
 佛く登海へなりひとあは  
 五病を智のあまの送る松う園

寓居

半日乃閑を構やせみ此夢  
 大佛のあまを宮様をみ乃芭  
 禪修や行者乃るる午の刻  
 野の啼や傍正城のゆあも時

築穂うての  
 松う園ハ鎌倉の尼寺に英徳寺と  
 して築穂を智の尼とてしむる  
 梅ののりはく法然上人の一枝起  
 清はそ森の尼入るとしむる



うけ香や何いともなるせみ衣  
 かけ香や唾の娘入りいともなる  
 うけ香やうきせぬる袖たみ  
 雁宕ふくおとほれまふれた  
 五とゑて扇の裏強おかつる  
 とくしてまきうちのはるまゐり  
 祇園のそれとほ中扇お夏を  
 色せとこの園画うんあれけ  
 後一草草るあまう扇

七日

祇園今や傍の  
 七ツヤよと歌きくく桃と糸を  
 其角なり  
 祇園茶んせの桃女とくまき  
 なる大我堂のあ玉圃ハるの疎  
 ふあつてつら  
 後寄今やま首赤の風も  
 こそと今や傍の傍なる桃と糸  
 か散る西岸う桐を  
 又山の口うさたりの夕まき  
 細木のたしあがり涼なる  
 そとさや都をほきくあれ川  
 首圃う穂をまきく  
 河津や蓮うまきく傍も



川原の鴨は御のまゝ居る  
涼しや鐘をたたくそねる夢

鴨のうらみ

川端や樓上のくろくろの鳥  
雨の月誰やあつきの暁白で  
月を智を弄る座網入小纏  
川端や海を東よりの舟をこ

雙林寺指籠手白

ゆふとちや華もついで一千言

白雨の門脇よのく人たまり  
夕とちや草葉をほむむむ雀

施米水粉

暇ありき傍ふかりの施米  
水乃粉のそのついで草の庵  
ふの粉やあつとをたれは君

旅意

廿日路乃宵中くらくやを傳  
揚州の傳もろくそくや此意







負北舟の青中流まやなをらへ  
出氷のかたむく柳舟(夏)後  
鴨河乃ちよのちある  
田中とのる里まで  
ゆめふくく北風とよくみせ川

蕪村白集上巻終



